

特集 2-3

大震災からの復興への取り組み事例 ③

JAM..(株) 聖人堀鉄工所

しようにんぼりてつこうしよ

17名の従業員を一人も解雇せず 全国の声援支えに操業再開へ！

今回、取材させていただいたところは、宮城県石巻市の海岸に面したところにある聖人堀鉄工所である。従業員は社長を入れて20人ほどで、特殊な小型巻き網漁船を年間8〜12隻製造している。そのほか、小型漁船の修理も行っている。聖人堀鉄工所は、1945年終戦の年に創業した。

阿部幸一社長（63歳）は、オーナー社長ではなく、従業員からのたたき上げで6代目の社長だ。船の修理からスタートしたが、近年は魚群を探るスキフボートなどの造船、修理を注文に応じてやっている。ングボート）や網で魚を取り込むスキフボートなどの造船、修理を注文に応じてやっている。

今回の震災では労働組合の平委員長が亡くなられている。阿部社長と組合の萬谷書記長から震災の被害状況と復旧への取組についてお話を伺った。佐藤勝彦JAM宮城事務局長にも同席いただいた。

7月7日午後1時、いつもJCM東北ブロックでお世話になっているJAM宮城の佐藤勝彦書記長の車に滑川次長と一緒に仙台駅前から乗せていただき、一路、石巻港をめざして、

高速道路を約1時間半、途中は稲穂や緑の田園風景がずっと続き、4カ月前にあれほどの大震災が起きたことなど、無かったかのようなのどかな風景が続いていた。

しかし、石巻港の1キロ手前あたりから、突如景色が一変した。信号ももぎとられ、どてっばらに穴の開いた新築の家がそこかしこに、パチ

ンコ屋の看板がひん曲がってあるだけの残骸やら、瓦礫の山、そして、海岸一体は、全てがもぎとられて一面焼け野原のような風景が飛び込んできた。

Q1 まずは今回の東日本大震災の被害状況について教えてください。

阿部社長 3月11日の東日本大震災の時の状況は、地震の時は、みんなで仕事をしている最中でした。新造船2隻の建造と修繕船5隻の修理をしているところでした。これまでも余震がずっと続いており、大きな津

波が来るときは、海水がすぐ引くのですが、今回は30分くらいは海水が引かなかつたので津波が来てもせいぜい1メートルくらいと油断していました。地震からちょうど1時間程後に高さ

10メートルの津波が襲ってきました。完成寸前の納期を間近に控えた小型船舶の新造船2隻と修繕船5隻も流されま

した。制作期間が半年くらいかけて造っていたものが流され、お金のこともありますがそれより、社員みんな



インタビューに応える 右側から阿部社長、萬谷書記長、佐藤JAM宮城事務局長（左側は聞き手の滑川次長）

なで労力をかけた長い時間が無駄になったことが悲しかったです。地震が起きてから社員自身の安全確保と自宅の状況を確認するため全員帰宅



①あたり一面ガレキと化した石巻の沿岸一帯 (左から2軒目が同鉄工所)



②鉄工所の前に置かれた焼け残った船

させましたが、早く帰ったから被災してしまった人、遅く帰ったから助かった人など、悲喜こもごもでした。残念ながら津波で従業員が2名亡くなりました。犠牲になった一人が労働組合の平委員長でした。平委員長は地震が来て海岸に近い自宅の様子を見るため車で帰宅途中、津波に巻き込まれ、車からは何とか脱出できましたが、助かりませんでした。平委員長の奥様も自宅付近で亡くなられた。自宅の方も津波で流されてしまった。海岸から離れたところに山が見えますが、子供がいる人があれだけの山に避難することは大変でした。

Q2 翌日に火災が起きたと聞きましたか？

阿部 震災の翌日に原因不明の火災で鉄工所の壁が燃えて、鉄骨と壁の一部のみが残りました。その火災で残っていた1隻が焼けました。(写真①、② 鉄工所の前の岸壁のところに、その焼けた跡の見える船が置かれていた) 火事の原因は不明であり、火災保険は、天災から75時間以内の火事は保険がきかないということで保険も出ませんでした。

Q3 大きな被害が出て、工場は鉄骨しか残らなかったということですが？

阿部 震災5日目に、瓦礫をかきわけて、ようやく鉄工所にたどり着きました。津波と翌日の原因不明の火災で1、2階骨組みの鉄骨と焼け残

った壁以外何もない工場を見て、正直、もう止めようと思いました。たぶんよそでも出来るような仕事ならば止めていたと思います。しかし、特殊網巻き漁船の造船、修理をやるところが他にないので、どうしてもやってほしいと、全国の客からの声援を受けました。全国のお客から「応援するから早く復旧して作ってくれ」「待っているよ」との激励の電話が次々に寄せられました。そんなにして待っていてくれる人がいるなら、やらざるを得ないと、3月下旬に操業再開を決定しました。機械工具を瓦礫の中から拾い集めました。

Q4 従業員の人たちはどうしたのですか？

阿部 他の中小の会社や町工場は従業員を解雇したところが多かったのですが、うちは従業員17名を一人も解雇しませんでした。3月分の給料を3月27日に現金渡ししましたが、そのときに社員全員がそろいました。社員の前で「船を造っているのは、この石巻で山西造船と鈴木造船とうちの3社しかない。何とか工場を補修して再開にかけている。操業再開してやるからには、みんなで力を合わせて、復興に向けてがんばりたいので協力をお願いしたい」旨挨拶しました。金庫や通帳、小切手、賃金

台帳などを流された企業が多いが、たまたま事務所を移転する予定だったので金庫から手形や通帳などを私のバッグに入れて持ち歩いていたので助かりました。パソコンも駄目になり、給料計算もできないので、前月の2月分の給料を元に推計して支払いました。

Q5 17名の従業員の方を一人も解雇しないで仕事も無い中で給料を支払い続けることは大変だったと思いますが？

阿部 これもあまり社員の数が多くないからできた話です。

佐藤事務局長 他の中小企業だったら、一斉解雇をやっているとこらだと思えます。雇用調整助成金も使っていないというか、使えない。基本的に今の雇調金制度は、こういう工場内の瓦礫撤去作業や整理作業をやっているときには使えないような制度になっているのです。

阿部 私が一番心配しているのは、もし緊急避難的に解雇した場合、解雇された従業員が自主的にボランティアで工場の後片付けをしていて怪我をして労災事故を起こした場合どうなるかということです。解雇しておきながら労災事故でも起こしたならば労働基準監督署がまた騒ぐことは間違いありません。中小の工場な



どには、どこからも瓦礫の撤去など手伝いもなく、ボランティアも来ないので全て自分たちでするしかありませんでした。鉄工所の操業再開をしようとしても、鉄工所を片付けるのは社員自分たちでするしかなかったですから、解雇などできませんでした。

佐藤 自分たちでこの鉄工所でまた操業再開するとしたら、必然的に社員全員で力を合わせて操業できる環境にしようと、自主的にボランティアで工場内の瓦礫撤去や整理・清掃作業をするのは当然のことです。

阿部 しかし、労働基準監督署は、工場内の瓦礫撤去や整理作業などはボランティア作業であり、労働作業とは認められないと言っています。工場内の瓦礫撤去や整理作業はボランティアではなくて、れっきとした労働作業だと主張していますが認められません。



取材に応える阿部社長

佐藤 ボランティア作業か労働作業かの境目は、工場の屋外だったら労働作業として認めるといいます。工場の屋外だったら、草むしりでも労働作業になると言います。これはおかしいので改定するようにJAMの組織内国会議員を通して要請しているところです。

阿部 鉄工所の後片付けを自主的にしていて怪我をされるのが一番こわいのです。だからそういうこともあり、解雇もせず全社員で一丸となって早期の操業再開をめざしました。

Q6 こういう阿部社長の姿勢については組合としてどう思いますか？

萬古書記長 組合員の雇用を守ってくれて本当にありがたいです。とりあえず仕事もあるので、人数も少ないですが、今いるメンバーで精一杯がんばっていききたい。震災当時はこの場所しか見えませんでした。当時は会社の工場で瓦礫を片付け、家に帰ると自宅の中の瓦礫や泥を片付け、正直言って震災後は鉄工所においても家に帰っても休みがほとんどありませんでした。心身共に疲れ切っていました、この鉄工所がどうなるのか労使共に不安でした。操業再開の目処も立ってきたので、震災でベテランの平委員長が亡くなって組合としても大変ですが、労使協力して操業再開に向けてがんばっていききたいと思います。

Q7 操業再開できたのはいつからですか？

阿部 操業再開は、5月ゴールデンウィーク明けからほぼほちできるよようになりました。電気が通ったのは、ようやく6月15日になってからです。電話はまだ通じていないので注文を受けたりするのにFAXもまだ使えません。ガスはプロパンガスで何と

Q8 従業員の皆さんの通勤とか住宅

の状況はいかがですか？

阿部 従業員は全員が車通勤ですが、津波で3分の2が流されてしまいました。一時は乗用車の値段が午前と午後で5万円くらい違うこともあったと聞きました。うちの会社のトラックも流されてしまい、今注文してありますが、トラックの新古車は今、新車よりも高いといえます。

従業員の住宅関係では、アパート、借家に入って流されたのが3〜4名、海岸近くで流された持ち家が数軒ありましたが、震災から4カ月経ち、従業員の生活もようやく落ち着いてきたところです。

Q9 今回の震災を通じて政府や行政への要望などあれば？

阿部 私の会社では17人の従業員を一人も解雇せずに、仕事も無い中で何とかお金を工面して給料も払っているところ。政府に要望したいことは、中小企業が仕事が無く大変な中でも雇用をきちんと保証した場合には、その代わりに休業補償を企業に後から補填するようにしてほしいのです。行政の方も中小企業に対して、従業員を解雇しないで対応するよう指導してほしい。こういう大規模災害の時には通常とは違うやり方が必要です。



ガレキの山が一面と続く鉄工所の裏手

事業主が死亡したり、事業所自体がなくなってしまう場合は仕方無いですが、中小企業の事業主にはできるだけ、雇用を継続してもらい、実際に働けないのだから、失業保険みたいに休業補償して、その分は企業に国から補填するようにした方が、従業員を解雇する必要もないし、ハローワークに並ぶ必要も無いので、窓口も混まない。事業所の事務所も、市役所も津波で流され、どちらにも資料が無いはずなのでそうしたほうがいいと思います。逆に働いている労働者にとっても、一旦、解雇されるのと、雇用を継続されるのでは

気分が全然違います。大規模災害の時は、国の方も杓子定規に考えるのではなく、中小企業のこととも考え、もっと現実的に対処してほしいと思います。

Q10 今後の課題について？

阿部 この鉄工所の一帯は、ほとんどの家屋が流されたり、燃えたりして更地になった中、鉄工所は、鉄骨の丈夫な骨組みと焦げた壁が残ったのが救いでした。この一帯は今後は公園地帯に指定され、建築制限で新築や改築が制限されていますが、修繕なら可能だからです。

一番心配なのは、2年後、この工場の周辺を公園にするという計画があることであり、集団移転区域に指定されていることです。2年後に、工場がきちんと軌道に乗ってきたときになって、他の地域に移動せよと言われても困ります。造船所は、やはり海に面したところに建てないと、内陸の方に建てても意味はありません。そういうことをきちんと想定した上での区画案を立てないと、ものづくり現場の場所の確保が大変なことになってしまいます。確かに、巨津波また来たら、大変な被害が出るでしょう。だからといって、造船所を内陸の安全なところに造る訳には

はいきません。震災後の区画案を、石巻を支えるものづくり現場の確保という視点も入れたものに早急に立て直してほしいと思います。

【取材後記】

聖人堀鉄工所は、石巻の岸壁地帯の一角にポツンと建つ3階建ての鉄骨がむき出しの小さな工場だった。あたり一帯は、津波で無残に破壊し尽くされ、被災した住宅や家の土台だけが残った家や瓦礫で、焼け野原のような感じだった。改めて津波の破壊力の大きさを実感。その岸壁に卡ろうじて残った同鉄工所を訪問。一週間後の操業再開に向け、工場建屋の修理が急ピッチで進められていた。取材場所のプレハブの会議室にも修復作業のモーターや電動ドリルなどの音が響く。阿部社長の従業員を大切にする姿勢がにじみ出た率直な思いを聞いた。組合の若き萬谷書記長はベテラン委員長を亡くし残された責任の重さを感じられた。JAM宮城の佐藤事務局長が若き書記長の思いを汲みながらいろいろと励ましている姿に中小労働運動の原点を見る思いがした。取材を終えて岸壁の港の向こう側を見ると、瓦礫の山が姿を現していた。